

## 修験寺の名残り 清住通りの「弥勒堂」

宇都宮伝統文化連絡協議会長 柏村 祐司



弥勒堂内部



弥勒堂全景

清住通り沿いに弥勒堂と称するお堂がある。近隣の人々からはむしろ「お三夜さん」の名前の方が馴染深い。今でも堂内にはかつての篤い信仰の名残りである「二十三夜尊」と墨書した提灯が天井から所狭しとぶら下がる。

三夜とは二十三夜のこと、月齢二十三日を忌み籠りの日とし、二十三夜の月を拜む。本尊を勢至菩薩とする。二十三夜の月は、真夜中頃に東の空から昇ってくる。したがって三夜様の縁日は、真夜中まで賑わうのが通例で、清住通りの「お三夜さん」も例にたがわず夜遅くまでお参りの人で賑わった。

ところでこの弥勒堂は、お堂の西隣に居住する君島家の所有である。君島家の住居は、何の変哲もない一般的な造りであるが、所蔵する文書から江戸時代までは寺、

それも普通の寺ではなく修験の寺であったことがわかる。寺号は廣隆寺、山号は本郷山、院号を明覚院と称し、本山は聖護院であった。

江戸時代まで、わが国は、神仏習合であり、その神仏習合を取込んだ代表的なものが修験道である。江戸時代、日光山等一部を除くと全国の修験寺は、天台系本山修験の聖護院、あるいは真言系当山派修験の三宝院のどちらかの支配下におかれた。明覚院は、天台系の本山修験聖護院の支配下にあった。

修験僧は、山伏とも言われ、普通の寺院の僧とは様々な点で異なっていた。修行は峰々を駆け巡り、呪力を得んとするもので、修行の折は額に兜巾をつけ、鈴懸衣をつけて結袈裟をかけ、手に法螺貝を持ち、背中には笈を、

そうした活動を展開したもので、男体山禪頂(男体山登拜のこと)の折の先達も務めた。一方、天台系の修験寺であることから日光山との結びつきも強く、日光山門跡が江戸から日光へ赴く途次、宇都宮へ立ち寄った際にはお出迎え、お見送りをしたのもある。

ところが明覚院は、明治初期新政府の命令により廃寺にさせられ、住職は還俗させられたのである。明治新政府は、神道を国家宗教とし、神仏分離令をくだし、神仏習合の象徴であった修験道の廃止を布告したのである。

ち、背中には笈を、背負い、手に金剛杖をつき、法螺貝を鳴らして山野を巡り歩いた。妻帯を許され、寺では加持祈祷を行い、庶民の様々な悩み、苦しみに対処、また霊山案内等をする等庶民にとって親しみ深い僧であった。

君島家の先祖も、それが強かったことからこれらご神像は、日光山の神である大(おお)巴(は)貴(き)命(みこと)、田(た)心(こころ)姫(ひめ)命(みこと)、味(あじ)耜(し)高(たか)彦(ひこ)根(ね)命(みこと)の三神の像と思われる。明治新政府の命令とはいえ、全てを廃棄することが出来なかった。庶民から篤い信仰を受けた「お三夜さん」を全面に出すことよって、かつての信仰の一部を継承しようとしたのである。密かにお堂に納められた神像や仏像に往時の修験寺の姿を見るのである。